＜京浜歴史科学研究会　2024年秋の歴史を歩く会＞

秋の鶴見・総持寺を歩く

ー鶴見神社・総持寺・生麦事件ー

「生麦事件現場」　横浜開港資料館蔵

【日時】２０２４年１１月１７日（日）（雨天順延　１１月２４日＜日＞）
＊実施の問い合わせは当日午前６～７時に下記の電話へ

【集合】京浜急行京急鶴見駅改札前　午前１０時
＊京急鶴見駅は快特・特急は停まりません。JR鶴見駅から徒歩約３分で京急鶴見駅まで歩けます。

【ルート】
京急鶴見駅→名主・佐久間家跡→鶴見神社→総持寺（三門　自由党追恩碑平成救世観音像　三宝殿　自由党大阪事件追念碑　仏殿(大雄宝殿)　大祖堂　総持寺墓地＜主な墓　アントニオ猪木　大西瀧治郎　芦田均　川上音二郎・貞奴　浅野総一郎　石原裕次郎＞→鶴見花月園公園（花月園跡）＜昼食＞→岸谷公園（三笠園跡）→安養寺→キリン横浜ビアビレッジ→生麦事件碑＜解散＞

＊歩く距離は４キロぐらいです。解散後は京浜急行生麦駅に出られます。

【参加費】1,000円（資料代、保険代）

【昼食】昼食（弁当）は各自でご持参下さい。

【解散】午後３時頃

「秋の鶴見・総持寺を歩く」・本日のコース

【集合】２０２４年１１月１７日（日）（雨天順延１１月２４日）

【コース】

京急鶴見駅
↓
名主・佐久間家跡
↓
鶴見神社
↓
総持寺
三門　自由党追恩碑　平成救世観音像　三宝殿　自由党大阪事件追念碑
仏殿(大雄宝殿)　大祖堂
総持寺墓地＜主な墓　アントニオ猪木　大西瀧治郎　芦田均　川上音二郎・貞奴　浅野総一郎　石原裕次郎
＞
↓
鶴見花月園公園（花月園跡）＜昼食＞
↓
岸谷公園（三笠園跡）
↓
安養寺
↓
キリン横浜ビアビレッジ
↓
生麦事件碑＜解散＞

＊本日の終了予定時間は午後３時頃ですが、場合によってはもう少し時間がかかることがあります。
＊途中、車の交通などで危険な箇所がありますので、前後の交通に注意し、なるべく一列になるようにご協力ください。
＊一番後方にも係員がつきますので、自分の速さで歩いて一日の行程を楽しんでください。
＊その他、わからないことがありましたら、青い腕章をつけた係員に申し出てください。

関　係　地　図

【解説】
近代の鶴見と生麦事件

今日、これから歩く鶴見という地域は、東海道の川崎宿と神奈川宿に挟まれた区間で、江戸時代には街道沿いに市場村・鶴見村・生麦村の小集落が点在していた。1855（安政２）年の家数を見てみると、鶴見１３３軒・生麦２５１軒に対し、神奈川宿が１４７７軒であり、その規模の差は歴然としている。享保年間に鶴見・生麦両村に立場茶屋が設けられ、鶴見・市場両村の名物「よねまんじゅう」の店が市場村で４０軒もあったという。これらの間の村も純粋な農漁村としてだけではなく、少しずつ商業的性格を備えた村落として発展しつつあったと言えよう。生麦村の街道沿いの立場茶屋のなかには、客寄せのために月の輪熊を飼いならし、店先につないで見せ物にしていた熊茶屋五右衛門の茶屋があった。この長崎のオランダ商館長に従って江戸に出たシーボルトは、その往復の道で、熊を見て「江戸参府紀行」のなかで「よく慣れていていろいろな芸をした」と書いている。

1872（明治５）年、新橋ー横浜間に鉄道が開通し、鶴見駅も開業した。しかし、村々の景観はしばらくの間、江戸時代とそう変わりはなかったようである。1889年、市制町村制が施行され、市場村が周辺諸村と合併して町田村に、また鶴見・生麦両村は東寺尾村を合わせ生見尾村となった。また1905年には、京浜電気鉄道（現在の京浜急行）の神奈川ー品川間が開通し、鶴見市場駅・鶴見駅（のちに京浜鶴見駅、京急鶴見駅と改称）が開業している。

この地域に大きな変化をもたらしたのは、1911年の総持寺移転であった。この移転により鶴見駅付近の商業が活性化した。

齋藤美枝『鶴見　総持寺物語』によれば、能登の総持寺が火災に遭ったのを契機に、「交通の便が良い関東に移転しては」という要望が上がったという。こうした意見により、千葉や八王子などの候補地の中から高台にあって四方を望める「鶴見ヶ丘」が選ばれたという。陸路と海路という２つの交通手段がある鶴見は、移転工事の資材を運ぶのに便利だったこと、当時の京浜電鉄社長雨宮敬次郎の進言もあったことが選ばれた理由ではないかと推察をされている。

この頃から、鶴見地域の本格的な埋め立てが始まっていった。鶴見区の埋め立ては江戸時代の末期から小野新田など小規模には行われてきた。大正時代になると、浅野総一郎などによって，大規模な埋め立て工事が始まった。浅野総一郎は、東京と横浜の間で遠浅である潮田の地先を埋め立てる計画をたてた。浅野は安田善次郎たちの出資を得て，1912 年に鶴見埋立組合を設立した。その後、神奈川県の認可を経て約 140 万坪の埋め立てが開始された。日本ではじめて導入された電動式サンドポンプの使用もあって埋立地が造成されると次々と企業が進出し始めた。旭硝子、浅野セメント、日本鋼管製鉄所、浅野造船製鉄所、スタンダード石油、ライジングサン石油、三井物産などの工場がつくられ、京浜工業地帯を形成していく。その後も、横浜市や神奈川県による埋め立てが隣接地で行われ、平成年間の大黒ふ頭の埋立地完成をもって 70 数年間にわたる造成が終了した。

大工場が進出すると共に、周辺部の宅地化も進められた。1921年、生見尾村は鶴見町となり、1925年に町田町を合わせ、1927（昭和２）年４月、横浜市に編入、さらに同年１０月１日の区制施行で鶴見区となった。

今日の最後の見学地は生麦事件に関する地域である。幕末に起きた生麦事件は、外交問題からはじまり国内の政治体制を左右するに至る重要な事件であったと言える。しかしそれほどの事件であるにも関わらず、生麦事件そのものに関しての専門的な研究は意外に少ないという。地元の方でこの事件に関心を持ち、自ら研究を重ねてついに私設資料館「生麦事件参考館」を創った浅海武夫さんも逝去され、現在、この地域で生麦事件を想起することは難しくなってしまっている。

コースの最後は「生麦事件碑」である。傷を負ったリチャードソンが、ここまで逃げてきて、ついに力尽きて息を引き取った場所がこの付近だという。今日はここで解散である。しかし、一歩先へ進むと「キリン横浜ビアビレッジ」の入口がある。ビール工場見学は現在は予約制であるが、入口右手のキリン横浜ビアホールへ寄っていくのもお勧めです。一日の疲れを癒し、ゆっくりとおくつろぎ下さい。

見学ポイントの解説

◆◆名主・佐久間家跡◆◆

当会の「県史を学ぶ会・大正昭和編」で読んでいる『佐久間権蔵日記』の佐久間家の跡地である。宝暦年間から明治維新を迎えるまでの120年間、鶴見村名主を務め「大佐久間」と称されたという。1644(寛永21)年の検地帳に佐久間外記の名で70石の記載があり、1682(天和2)年の年貢割付帳を最古に種々の古文書・記録が残されている。1981年の横浜開港資料館開館に当たり、当時の当主佐久間亮一氏(故人)から、それらが寄託されている。日記を残した16代権蔵亮弼(1861～1932)は、家業の味噌醸造業を営むと共に、生見尾(うみお)村会議員・橘樹郡会議員・鶴見町会議員・神奈川県会議員(立憲民政党)を勤めた。佐久間家の屋敷地は東海道からＪＲ線路際までに及ぶ広大なものであったようである。当会で前回、この地区を歩いた1998(平成10)年には、まだ一部が遺っていて玄関先を眺めた記憶があるが、2001年には無くなりマンションに代わったようである。

佐久間家の庭で　後列中央が権蔵（亮弼）、右先代権蔵（亮義）、左長男道夫、前列左から妻かね、母しの、長女芳子。　佐久間亮一氏寄贈

◆◆信楽(しがらき)茶屋跡◆◆

旧東海道筋の鶴見神社参道入口に設けられた茶屋の一つ。竹の皮で包んだ梅干しを販売し、大山阿夫利神社の祭礼の時期には賑わったという。鶴見は川崎宿と神奈川宿の間にある立場(たてば)(間の宿(あいじゅく))で、名物「よねまんじゅう」を売る店や茶屋が設けられていた。大正期の当主は『佐久間権蔵日記』に登場する平野金蔵である。反対側の参道東側には関口象寿を主人とする「あけぼの茶屋」があった。現在のラーメン屋は、平野家とは無関係で、建物も戦後のものという。

◆◆鶴見神社◆◆

1920（大正9）年2月10日に鶴見神社と改称されるまでは、杉山神社(杉山明神(せんげん)、八坂神社、浅間(せんげん)様)と称し、鶴見村の総鎮守であった。 祭神は素戔嗚尊(すさのおのみこと)（牛頭(ごず)天王と習合、厄除けの神として信仰）と五十猛命(いたけるのみこと)(スサノオの子)など。創建は推古天皇(554～628)の時とされており、定かではないが、横浜・川崎地区で最古の神社となる。延喜式内社とされ、『吾妻鏡』の仁治2(1241)年11月には鎌倉幕府第4代将軍藤原頼経(1218～56)が参詣したとある。その折りに奉納した欅が巨木となっていたが、1962(昭和37)年に枯死し、その根本から祭祀遺物やツボ・カメなどの生活用具が出土した。さらに2008(平成20)年2月に本殿の東側が発掘調査され、東西5～8m、南北10m、厚さ70～80ｃｍの貝層の存在が確認された。周囲から古墳時代前期の竪穴住居跡も発見されており、同年11月11日には弥生時代末期から古墳時代前期にかけての貝塚遺跡として横浜市指定史跡とされた。

1753(宝暦3)年正月、黒川四郎左衛門の心願によって社殿の造営があり、その後、1835(嘉永6)年6月、佐久間権蔵(先々代か)が社殿を改築したという。脇からの入口、階段上に「宝暦十三(1763)年」「十一月」に建立された石鳥居が遺る。江戸時代前期(17世紀後半頃か)、鶴見川の天王河岸(潮見橋付近)に上流から大神輿が流れ着き、茅を刈っていた百姓が長柄の鎌で引き寄せ、神社に奉納した。現在の川崎市幸区小倉(おぐら)の小倉神社(旧天王社)の神輿を鶴見川で洗っている時に誤って流してしまったものであろうという。7月の天王祭で28日の大神輿渡御に登場するのがそれで、横浜最古の神輿とされる。

1870(明治3)年4月、神仏分離令により別当寺天台宗西照寺が廃寺となる。1873(明治6)年12月、村社に列せられた。鶴見は火事が多く、ようやく1899(明治32)年1月12日に再建されたところ、翌年1月11日の大風の日に汽車の火の粉を浴びて全焼、以後、仮社殿のままであったという。〈1911(明治44)年3月31日に同様の原因による鶴見大火があり、200余戸が消失したというが、鶴見神社が被災したかどうかは定かでない。〉ようやく再建されたのは、1915(大正4)年の大正天皇御大典記念の事業としてであった。『権蔵日記』によると11月9日(火)に新造なった鎮守拝殿で遷宮式を行い、翌10日(水)に「御大典ノ奉賀式」が挙げられた。さらに12月5日(日)には「鎮守ノ上棟式兼竣工式」が挙行されている。本殿の裏に回ると社殿を載せた溶岩などで組まれた石の台座の中に大工棟梁谷川竹蔵や石工らの名を刻んだものが見られ､「大正四年十一月」とあり、『日記』にも登場する、この時の世話人であった岩宮平蔵や中山冨五郎、関口栄吉らを確認することができる。

拝殿の前には溶岩石で組まれた大きな2基の狛犬が目を引く。1928(昭和3)年6月に鶴見消防一番組が昭和天皇の御大典記念に奉納したものとある。裏面の「連名」には、小頭岩宮平蔵・関口栄吉らを確認できる。

本殿裏には富士塚(浅間社)がある。1872(明治5)年の横浜・新橋間の鉄道開通に際し、境内の西半分が接収された。現在のＪＲ東海道線が走っている場所にあった3500坪の古墳を移したものという。

民俗芸能として、鎌倉時代から(平安時代の延喜頃からとも)正月16日に行われていた田祭り(田遊び)があったが、1871年に県からの指示で廃絶されたという。前年の天社神道禁止令によるものかも知れない。1983(昭和58)年に田祭りを復活させようという機運が高まり、1986年に「鶴見田祭り保存会」が設立され、1987年4月29日の杉山祭で田祭りが奉納されて、115年ぶりに再興された。2017(平成29)年11月には横浜市地域無形民俗文化財に登録された。

◆◆清明宮◆◆
　1970（昭和45）年11月25日に自衛隊市ヶ谷駐屯地で自決した三島由紀夫・森田必勝の40年祭にあたる2010（平成22）年11月25日に建立。三島は若いころ通っていた鶴見区内にあったバー「仔馬」の経営者と大変懇意にしていた。その関係もあり三島・森田両名の三十年祭から、二人の慰霊祭を毎年鶴見神社で行っている。
＊三島由紀夫（1925～1970）
　小説家。東京市四谷区生まれ。本名平岡公威。学習院初等科・中等科・高等科を経て、東大法学部卒業。一時期大蔵省（現財務省）勤務。ボディビルで体を鍛え、自衛隊に体験入隊。楯の会を結成し、1970年11月25日、自衛隊市ヶ谷駐屯地において自衛隊に決起をうながし自刃。主な作品に『仮面の告白』、『潮騒』、『金閣寺』、『豊饒の海』など。
＊森田必勝（もりたひっしょう、1945～1970）
　三重県四日市市生まれ。早稲田大学教育学部卒。三島由紀夫の楯の会に入会。自衛隊市ケ谷駐屯地で三島の介錯をしたのち、自らも切腹した。

◆◆総持寺◆◆
　正式名を諸嶽山総持寺（しょがくさんそうじじ）といい、福井の永平寺と並ぶ日本曹洞宗の中心寺院（大本山）である。もとは石川県輪島市にあったが、当初は真言律宗の教院であった。それを曹洞宗４世の瑩山紹瑾（けいざんじょうきん）が1321年禅寺にしたのである。
　以来天皇、幕府の庇護を受け、1615年永平寺と並んで大本山となった。しかしながら1898年４月本堂の一部から出火、猛火が全山に広がり伽藍のほとんどを失うことになった。
　1905年5月本山貫主となった石川素童（いしかわそどう）禅師は「焼失した伽藍の復興のみでなく、本山の存立意義と宗門の現代的使命の自覚にもとづいて」（総持寺公式サイト）、1911年現在地に寺を移した。
　境内の面積は約50万平方メートルあり、仏殿、大祖堂をはじめとする幾多の堂宇があるだけでなく、鶴見大学などの学校施設もある。仏殿をはじめとする主要建物の多くは20世紀前半の木造建築であり、大祖堂、三門などは太平洋戦争後に建立された鉄筋コンクリート造である。

◆◆桜木観音◆◆
　正式な名称は、桜木町電車事故死者慰霊碑である。桜木町事故は1951（昭和26）年4月24日午後1時45分ごろ、国鉄（現・ＪＲ）京浜東北線の５両編成の電車が桜木町駅に進入する直前、最先頭車のパンダグラフが断線、垂れ下がった架線にからまり電気ショートにより車両火災が発生した。火は瞬く間に先頭車を全焼し２両目に延焼。死者103名、重軽傷者95名の大惨事となった。
　この事故で死去した犠牲者の冥福を祈るため、1952年4月24日、当時の東京駅長と国鉄労組委員長の発起により、桜木観世音菩薩が建立された。像は彫

刻家赤堀信平氏の制作、「桜木観世音菩薩」の名号及び遭難者氏名は、当時の鎌倉円覚寺管長朝比奈宗源が揮ごうした。

◆◆平成救世観音像・祈りの鐘◆◆
　2011(平成23)年3月11日に東日本大震災が発生した。この年は総持寺が鶴見に移って来てちょうど100年目に当たっていて、その報恩などの為の法会が予定されており、それに先立ち2008年6月21日に聖観世音菩薩像が建立されていた。長崎平和公園の平和祈念像の作者北村西望(1884～1987)作の原型に基づいて製作されたという。元は仏殿と大祖堂の間に建立されていたが、2013年3月11日、大震災3回忌を期して、遠く被災地の方向を望むこの丘に遷座することとし、新たに「平成救世観音」と命名された。
　「祈りの鐘」は2017年3月11日の被災7回忌に当たり、本山にある大瑩子を再鋳造して、新たにベル3基を設けたという。諸人によって打ち鳴らされ、幾多の御霊を慰めると共に、人々の喜びと希望に満ちた安らぎの日々を願われたいとのことである。

◆◆自由党追恩碑◆◆
　碑の裏面から1921(大正10)年１月、立憲旧友幽明会によって建てられたことが分かる。同会は総裁に板垣退助(1837～1919)を仰ぎ、会長に大江卓(天也、1847～1921)、建碑委員長に杉田定一(1851～1929)が名を連ねている。建碑副委員長の一人、森久保作蔵(1855～1929)は多摩出身の民権運動家で、日清戦争時には佐藤貞幹(1852～1908)らと軍夫玉組を組織して澎湖諸島に渡ったこともある。1874(明治７)年、前年の征韓論政変で下野した板垣退助らによって民撰議院設立建白書が提出された。これを契機として、国会開設・立憲政体樹立などを要求する自由民権運動が展開する。運動は全国的政党、愛国社・国会期成同盟の活動を経て、明治14年政変後に結成された自由党および立憲改進党に受け継がれていった。自由党の流れは、藩閥政府の代表として攻撃の的となっていたはずの伊藤博文(1841～1909)を総裁に迎えての立憲政友会に伝えられることになるが、その成立にあたって幸徳秋水(1871～1911)は「自由党を祭る文」(『万朝報』明治30年8月30日)を書いて、反政府勢力としての自由党の消滅を嘆いた。

◆◆自由党大阪事件追念碑◆◆
　1931(昭和６)年11月に遺族及び関係者らによって建立された。題字の「大阪事件記念碑」は玄洋社の頭山満(1855～1944)による。発起人の遺族代表には大井憲太郎(1843～1922)・磯山清兵衛(1855～91)・新井章吾(1856～1906)・山際七司(1849～91)・村野常右衛門(1859～1927)・森久保作蔵らの遺族の名が見え、生存者の中には、秩父事件で中心的役割を担った自由党トリオの一人落合寅市(1850～1936)や、神奈川県の金子角之助(1867～1937)らがおり、その一人小久保喜七(1865～1939)はこの総持寺に眠る。碑文を書いた河野広

躰(1864～1941)は1882(明治15)年の福島事件の河野広中(1849～1923)の甥で、同事件では無罪となったものの、のち加波山事件(1884.9)で捕らえられた人物である。

1884(明治17)年、朝鮮で閔妃(1851～95)を中核とする事大党政権に対して、親日的な金玉均(1851～94)・朴泳孝(1861～1939)らの独立党が日本公使館の援助を得てクーデターを企てた(甲申事変)。清国軍の出兵によって鎮圧され、金らは日本に亡命したが、これを支援して、朝鮮革命を成功させようと考えたのが、旧自由党（同年10月29日解党）急進派の大井憲太郎らであった。朝鮮渡航と軍費調達のために強盗殺人の罪を犯し、渡航寸前に発覚し(1885年)、裁判が大阪で行われたことで、大阪事件と呼ばれる。神奈川からも大矢正夫(1863～1928)ら純粋な志を抱いた民権青年らが多く関与し逮捕されている。

◆◆アントニオ猪木◆◆

本名は猪木完至、プロレスラー、実業家、政治家として活躍。横浜市鶴見区生麦町（現在の鶴見区岸谷）出身。11人兄弟の９番目として生まれる。父親は猪木が５歳の時、横浜市議会議員選挙に自由党から立候補したが、選挙期間中に心筋梗塞で急死。12歳で横浜市立寺尾中学校に入学するも生活は厳しく、13歳の時に母親、祖父、兄弟とともにブラジルへ渡り、サンパウロ市近郊の農場で少年時代を過ごす。

1960年、興行でサンパウロを訪れていた力道山から直接スカウトされて日本へ帰国、日本プロレスに入団。ジャイアント馬場と同日の1960年9月30日、本名の猪木完至としてデビュー、翌年リングネームをアントニオ猪木に改名した。

その後、東京プロレス、日本プロレスを経て、1972年に新日本プロレスを旗揚げした。その後、異種格闘技戦を打ちだし、プロボクシング統一世界ヘビー級チャンピオン、モハメド・アリとの一戦は世界各国に中継され話題を呼んだ。1989年「スポーツを通じて国際平和」を合言葉にスポーツ平和党を結成、参議院議員選挙に初当選し、史上初のレスラー出身の初のレスラー出身の国会議員となった（「国会に卍固め、消費税に延髄斬り」)。1998年4月4日東京ドームにおいて引退。2022年10月1日79歳で死去。

◆◆大西瀧治郎◆◆

1891（明治24)年～1945（昭和20)年。兵庫県出身。海兵(第40期)卒。横須賀航空隊長、佐世保航空飛行隊長、連合艦隊参謀を経て、第2連合航空隊司令官となり日中戦争に従軍。第1連合航空隊司令官、第11航空艦隊参謀長となり、ハワイ攻撃計画の研究を命じられた。1942年航空本部総務部長、翌年中将に昇進し、1944年第1航空艦隊長官となりレイテ作戦で初の特攻攻撃機の出動を

命令した。1945年軍令部次長、同年8月16日自決した。

◆◆益田孝（ますだたかし、1848－1938）◆◆

茶人益田鈍翁としても知られる。父益田鷹之助は幕府の佐渡島の地元役人であったが、その後、箱館奉行支配調役下役に栄転し、1857（安政4）年、江戸詰を命じられ、江戸に移る。この間、孝は箱館や江戸で英語を学ぶ。やがて、麻布善福寺のアメリカ領事館詰を命じられる。1863（文久3）年の遣仏使節団に父の小遣として随行した。帰国後、慶応4年1月、騎兵頭並に任じられた。維新後、井上馨の推薦もあって、大蔵省に入る。1876（明治9）年以降、三井物産会社社長となり、同11年（1878)、渋沢栄一らとともに東京商法会議所を創設した。以後も三井財閥の発展に尽力している。

妹は幕府軍医永井玄栄の養女となり、岩倉使節団の5人の女子留学生の1人永井繁子である。

◆◆芦田均（1887 ～ 1959）◆◆

京都の現福知山市に生まれた。生家は豪農であった。東京大学法学部を出て、外交官となり、1932年退官（在ベルギー日本大使館参事官）し、政界入りした（父親も衆議院議員であった)。立憲政友会に所属し、軍国主義が広まる議会においてリベラリストとして活動。斎藤隆夫の反軍演説の際には除名に反対票を投じた。戦後は自由党の結成に関与した後、離党して民主党を結成し、1948年3月総理大臣となった。しかし政権基盤が脆弱であり、野党自由党からの攻撃に苦慮し、ＧＨＱ支配のもと独自の政策を打ち出すこともできなかった。そこに昭和電工事件がとどめを刺す形となって退陣に追い込まれることになった（1948年10月)。そのあと、1955年の保守合同にも参加した。晩年の10年は史書を著すことに重きを置き、「第二次世界大戦外交史」を病床の中で完成させている。

◆◆堺利彦◆◆

社会主義運動家。粘川などと号す。1870(明治3)年、豊前国仲津郡豊津で香春（かわら）（旧小倉）藩士の三男に生まれる。豊津中学校を首席で卒業後、1887(明治20)

年に第一高等中学校に入学するが、吉原に登楼して遊興と文学に溺れ、月謝滞納で除籍処分となる。89年、長兄急死のため帰京、老父母と共に大阪に出て、小学校教員・新聞記者を転々として生計を立て、浪花文学界に加わり、森鴎外や尾崎紅葉に認められた。両親の死後、東京で96(明治29)年に堀美和子(妹保子は大杉栄の妻)と結婚。福岡日日新聞社に入り、「人不知」の連載を始めたが、上司と対立して4ヶ月で退社。同郷の先輩末松謙澄(1855～1920)を頼って上京、毛利家編纂所に入り『防長回天史』編集事業に加わった。99年に『萬朝報』記者となり、翌年の北清事変に特派記者として従軍した。1901(明治34)年には社会改良を旗印とする理想団創設に参画、また言文一致運動にも貢献した。03年10月、『萬朝報』社主黒岩涙香(1862～1920)が日露開戦論に転ずると、非戦論を唱えた幸徳秋水(1871～1911)と共に退社、平民社を起こして週刊『平民新聞』を創刊した。05年に平民社が解散すると、由文社に拠り『社会主義研究』を創刊して、マルクス主義の研究と普及に努めた。06年の日本社会党結成に参加、翌年の禁止後は幸徳の金曜会に属した。08年6月の赤旗事件で入獄したため、10年の大逆事件での連座を免れた。出獄後、幸徳ら刑死者の遺体を引き取り、遺族慰問の旅を行った。社会主義にとっての「冬の時代」であっても、『新社会』を発行し、17(大正6)年の総選挙にも立候補した。また10年12月に売文社を起こして同志の生計に当て、自らもユーモア小説・随筆などを執筆し、ルソー、ゾラ、ショウ、レーニンなどの作品を翻訳した。20年には大杉栄(1885～1923)らと日本社会主義同盟、22年に山川均(1880～1958)らと日本共産党を結成した。山川との合法大衆化路線は、福本和夫(1894～1983)らと対立し、1927(昭和2)年の27年テーゼによる山川批判などで共産党とは訣別した。この年11月、脳出血により運動の第一線からは退くが、無産政党に関わり、29年2月の東京市会議員選挙には、牛込区から最高点で当選した(東京無産党)。31年7月には全国労農大衆党の反戦特別委員会委員長に就任したが、満州事変が起き、12月に再び脳出血に倒れ、再起できずに33(昭和8)年1月に死去した。

◆◆川上音二郎・貞奴◆◆

川上音二郎（1864～1911）

俳優、興行師、落語家、講釈師、自由民権運動家。九州博多生まれ。おっぺけぺえ節で人気を得る。川上座、帝国女優養成所を創設。正劇（翻訳劇）運動を続け、新派劇発展の基礎を固めた。演劇近代化の先駆者。欧米巡業も行ない、1899（明治32）年にパリで一座の音声を録音（日本人の声を収めた最古のレコード）。パリ勲三等芸術勲章、ベルギー芸術大学上演記念章受章。

川上貞奴（1871～1946）

芸妓、新派女優。本名貞。旧姓小熊。東京府日本橋生まれ。葭町で芸妓となる。川上音二郎と結婚後、夫とともに欧米を巡業し女優となり、帝国女優養成所、川上児童劇団を創設。パリ万博(1933年)にも出演し、〝マダム貞奴〟と呼ばれた。夫音二郎の死後、福沢桃介（福沢諭吉婿養子、大同電力社長）と同棲。岐阜県各務原市に貞照寺（成田山新勝寺末、諸芸上達・芸能祈願）と別荘・晩松園（国の登録有形文化財）を建立。

◆◆浅野総一郎（1848—1930）◆◆

現在の富山県氷見市の医師浅野泰順の長男として生まれた。若くして事業を興し、地元物産の販売等を手掛けるも失敗した。1871（明治４）年に上京し、薪炭・石炭などの販売を通じて渋沢栄一の知遇を得1884（明治17）年に払い下げられた官営深川セメント工場を浅野セメント（後の太平洋セメント）として発展させる。また道教の安田善治郎の資金援助を受け、海運・鉱山・造船・鉄鋼・電力など多角的に事業を展開し、一代で浅野財閥を築き上げた。ＪＲ鶴見線には、浅野駅、安善駅（安田善次郎）、大川駅（大川平三郎）、武蔵白石駅（白石元治郎）、扇町駅（浅野家の家紋）とあるように、浅野ゆかりの駅名が付けられている（埋立地の地名にも使われている）。

◆◆石原裕次郎（1934～1987）◆◆

戦後日本を代表する映画スターで、兄は小説家・政治家の石原慎太郎（1932～2022）。神戸市で生まれ、北海道小樽市及び神奈川県逗子市で育つ。高校ではバスケットボールの選手であったが、けがで断念。その後内部進学で慶応大学に進学するが、目標を失ったこともあって、「太陽の季節」を地で行くような生活に明け暮れていた。

1956年「太陽の季節」の映画化の時に、原作者慎太郎の推薦もあって同映画の端役での映画デビューとなった。その後日活と契約し、「狂った果実」では主演となり、大学を退学して1957年から本格的活動に入り、「俺は待ってるぜ」「嵐を呼ぶ男」などが軒並みヒットし、1950年代の終り頃に人気はピークを迎えた。しかしながら小林旭人気の高まりとともに、これまでとは違った作品に出演するようになった。

63年には石原プロモーションを設立。68年三船敏郎とともに制作した映画「黒部の太陽」は大ヒットしたが、映画界斜陽の時代で、その後の作品では

興行成績が悪化、テレビに出演舞台を移して生き残りを賭けることになった。「太陽にほえろ」や「大都会」、「西部警察」などは好評を博し、番組は長く続くことになった。

「タフガイ」と呼ばれたものの晩年は病に苦しみ（舌癌、解離性大動脈瘤、肝臓癌）、52歳で死去した。

◆◆鶴見花月園公園（花月園跡）

1914（大正3）年に平岡廣高によって「花月園」の名称で開園された遊園地。平岡廣高（1860―1934）は、新橋の料亭花月楼の主人であった。彼は欧州を旅行したときに、フランスのフォンテンブローにあった遊園地に感銘を受けた。帰国後、鶴見の東福寺の敷地を借りて、花月園を開園させた。敷地は2万5千坪ほどで動物園、噴水、花壇、ブランコなどの施設や「大山すべり」「豆汽車」などのアトラクションを設け、京浜電気鉄道（現在の京浜急行電鉄本線）に花月園前駅（現在の花月総持寺駅）も開設された。宝塚遊園地の宝塚歌劇団にならって花月園少女歌劇団を結成し、宝塚との交流も行ったことから『西の宝塚・東の花月園』とまで評されるようになった。1925年（大正14年）に入場者数はピークを迎えた。

しかし1920年代になると近隣に多摩川園や三笠園が開園してからは人気が衰えた。1933（昭和8）年には600万円の負債を抱え、経営権は京浜電気鉄道や大日本麦酒などが中心となって設立した株式会社花月園に譲渡された。その後、経営権は東京急行電鉄、日本鋼管などが設立した京浜工業協会（後の鶴見工業会）に移譲されることになり、従業員の慰安施設として使われた。高台にあったことから戦時中には高射砲陣地としても使用された。戦後、閉園となり花月園競輪場となったが、2010（平成22）年3月に廃止となった。競輪場も解体され、現在は防災公園を兼ねた鶴見花月園公園となっている。

◆◆岸谷公園（三笠園跡）

三笠園は横浜の生糸商山崎積蔵（あつぞう）が1919（大正8）年に個人で開園した。「鶴見町誌」によると、花月園が「人工の美を極め」ているのに対し、三笠園は「天然の美を現して、山は緑に水は清く、都会生活者一日の清遊に心身をすすぐに適当したもの」だったという。当時有名だった蒲田の菖蒲園から花菖蒲2万6千株を移植し、池のまわりには桜並木と松並木、四季折々の花が配されていた。中心にあった房野池では、1920（大正9）年にベルギーのアントワープで開催されたオリンピックの競泳の練習や予選が行われた。関東大震災後の1924（大正13）年には山崎積蔵の個人経営から、三笠園土地住宅株式会社による会社経営へ変わる。そのころ園内には、大花壇野外劇場、大運動場、児童遊技場、ボート、和洋の食堂数軒があった。しかし草花以外に大した施設もなく、便利が良くないために入園者が少なかった、結局、1927（昭和2）年に開園からわずか８年で閉鎖となる。房野池は埋め立てられ、1937（昭和12）年に市営の岸谷公園プールとなった。

◆◆安養寺◆◆

浄土宗。一到山弥陀院。1500(明応9)年創建ともされるが、開山慶誉がその年7月7日遷化(死去)ともいうので、実際にはその少し前かも知れない。戦国時代まで、子安の「風早台」(現市立生麦中学校あたり)にあったが、戦火に遭い、江戸時代初期に現地に移ったともいう。1676(延宝4)年に厳誉が中興し、1724(享保9)年3月に廓誉が再建した。

江戸時代から生麦村の名主を勤め、18世紀半ばから20世紀初頭までの約140年間の日記を残した関口家の墓所がある。横浜市教育委員会から『関口日記』(全26冊)として刊行されている。関口家は小田原北条氏時代、子安郷の土豪であった関口外記の末裔で、生麦村の草分け百姓であった。屋号「万年屋」の八郎右衛門家が本家となるが、日記を残す関口家は宝暦年間(1751～63)に、さらに本家から分家していた原の関口本家・与次右衛門家から分かれた分家という。初代藤右衛門(藤助)の1762(宝暦12)年から始まり、2代目藤右衛門(藤五郎・東園、～1849)が名主となり、3代目東作(金水、～1862)、4代目昭房(東右衛門、1833～1901)と続き、5代目昭知(英太郎、1857～1943)の1901(明治34)年で終わっている。

徳川家康の妻築山殿の実弟とも言われる、今川家臣関口刑部を祖とする次郎右衛門家もあって、名主も勤めた。1906(明治39)年に石橋銀行生麦支店を設立して経営に当たり、家は「銀行」と呼ばれたが、金融恐慌に遭い、1927(昭和2)年に倒産した。

◆◆生麦事件参考館跡◆◆

京急線生麦駅近くで家業の酒店を営んでいた浅海武夫（あさうみたけお）氏が、リフォームを機に自宅敷地内に建設し、1994年に開館した。千点以上ある資料が保管されている。浅海氏の体調不良に伴い2014年5月3日に閉館となり、現在もその活用法について議論がなされている。

◆◆キリンビール横浜工場◆◆

キリンビールは、横浜に設立されたビール会社である。もともとは横浜の山手に設立されたスプリングバレー・ブルワリーが起源である。1888年に 最初のビールを仕込み、「キリンビール」のブランド名で発売した。1889年には、「キリンビール」ラベル図柄を変更し「麒麟」が大きく描かれた現在に至るまで親しまれているデザインとなった。1907年、麒麟麦酒株式会社を設立。しかし1923年の関東大震災で山手の工場は壊滅してしまった。そのため、新しい工場設立をめざし、1926年に横浜工場が鶴見に完成した。

◆◆生麦事件◆◆

文久2年8月21日（1862年9月14日）、薩摩藩主島津忠義の父島津久光が江戸から東海道を南に進み、横浜近郊の生麦村（現横浜市鶴見区）で4人のイギリス人と交錯した。

4人は上海在留の商人リチャードソン、横浜居留地の生糸商人マーシャル、横浜アメリカ系総合商社ハード商会のクラーク、香港の商人の妻ボロデールであった。この日、馬に乗って、川崎方面に向かっていた。

イギリス人たちは乗馬したまま久光の駕籠に接近したため、薩摩藩士奈良原喜左衛門らによって、リチャードソンが斬りつけられた。とどめを刺したのは薩摩藩士海江田信義といわれている。

リチャードソンは深い傷を負いつつも逃走したが、傷は致命傷であったため、イギリス公使館付医師ウィリアム・ウィリスが治療に当たったが、間もなく絶命した。

◆◆生麦事件碑◆◆

鶴見村戸長黒川荘三（くろかわしょうぞう、1846—1936）が1883（明治16）年、傷ついたリチャードソンが逃げて絶命したと伝えられる場所に碑を建てた。斬りつけられた場所はこの碑の600mほど東の地点である。碑の撰文は儒者・教育者、貴族院議員の中村正直（なかむらまさなお、1832－1891）である。彫刻は鶴見川流域に住む石工飯島吉六（いいじまきちろく、生没不詳）が担当した。1935（昭和10）年５月16日から使用開始された鶴見郵便局の風景印に、生麦事件碑が描かれていたが、1940（昭和15）年に使用が中止された。戦後の鶴見郵便局の風景印には生麦事件碑は使用されなくなった。碑は1988（昭和63）年11月1日に横浜市登録文化財となっている。

石碑は、2010（平成22）年に首都高速横浜北線の工事のため、200m程離れた場所に仮移設されたが、2017（平成29）年に再整備され、首都高速神奈川７号横浜北線の高架下の元あった場所へ戻された。石碑はかなり傷んでおり、焼香の遠慮を促す掲示がなされている。

あなたも京浜歴科研へ

京浜歴史科学研究会は、京浜地域に生まれた歴史を科学する、市民・学生・教育者・研究者などの共同の集いです。地域の歴史に関心をお持ちの方、歴史を科学的に学ぼうとなさっている方、是非ご入会下さい。

「神奈川県史」を学ぶ会

□大正昭和編

毎月１回、原則として第一土曜日午後３時から５時まで、横浜市野毛地区センターにおいて、近代史料を読んでいます。現在は横浜開港資料館蔵『佐久間権蔵日記』の原文書を読み、横浜近郊についての学習に取り組んでいます。近代史料は読みやすいので史料に接しなれていない方でも大丈夫です。資料はこちらで全て用意してありますので、筆記道具だけでお出かけ下さい。

□幕末開港編

毎月１回、原則として第一土曜日午後６時３０分から８時３０分まで、横浜市野毛地区センター（ＪＲ桜木町駅徒歩１０分）において、現在は『新横須賀市史』資料編近世Ⅱを読み、海防期の浦賀近辺の学習を行っています。

『京浜歴科研会報』

毎月２５日に発行し、会員にお送りしています。研究会の記録・史料紹介・書評・投稿などを載せ、会と会員のパイプ役を務めています。

『京浜歴科研年報』

毎年１回発行しています。会員の論文、シンポジウムの記録等を掲載しています。現在３６号まで刊行されています。

「歴史を歩く会」

研究会の学習をもとに原則として春と秋の２回「歴史を歩く会」を行います。足と目で歴史をさぐり、歴史のイメージを豊かにする会です。

「集中研究会」

毎年春・夏２回、研究上必要な主要文献を読んだり、歴史理論などの学習を行う会です。

単行本

京浜歴史科学研究会編『近代京浜社会の形成』岩田書院、2004年12月刊、4000円＋税

【連絡先】〒233-0006　横浜市港南区芹が谷５－５９－１２大湖（おおご）賢一方
京浜歴史科学研究会事務局
TEL・FAX　０４５－８２５－３７３６
Ｅメール oogo@mvj.biglobe.ne.jp
HP　http://keihin-rekika.org